

## 港市・長崎の形成過程と都市構造

林 一 馬\*

Urban Formative Process and Structure of NAGASAKI  
as a Port-City

HAYASHI Kazuma

It can be said that Nagasaki is the most famous and special port in the early modern period of Japan. Therefore many studies have accumulated on the problem of the city's urban formative process. But, in my view, the problem has not been clarified yet in the main point. Moreover, the arguments in detail have led in the wrong direction.

So I tried to investigate the problem anew in this paper, based on critical examination of related documents and past studies through the viewpoint of urban history. As a result, Nagasaki will be recognized rightly as one of the typical 'port-city' in the strict sense of the word.

## はじめに

建築史学会の2004年度大会が同年4月24日(土)、法政大学市ヶ谷校舎(ボアソナードタワー26階スカイホール)を会場にして開催された。大会の記念行事として、「海からの建築史、川からの都市史」をテーマとしたシンポジウムが企画され、実施された。筆者は、5人のパネリストの1人として、「海から見た長崎の都市・建築」というタイトルを与えられて報告する機会を得た。シンポジウム全体の概要は、当学会の機関紙『建築史学』の次号(第43号, 2004年9月発行予定)に掲載されるのが慣例となっているので、それを参照されたい。

本稿は、それに際し、事前に提出した同名のレポートをほぼそのままに再録しようとするものである(補注1)。

当日のスライドを用いた発表では、レポートの末尾に項目として示した「5. 海を渡った建築術／眼鏡橋、唐寺、洋館、天主堂」にもかなり詳しく論及したのだが、文章としてはその前の「4. 外国人居留地の造成と港湾改修による近代都市・長崎の形成と変遷」ともども、今もって未完のままととなっている。これを完成させることは別の機会を期したいが、ここでは一応の完結をみている前半部を記録化することを主眼とする。この点が再録に当たって、標題をひとまず上掲のように改めた最大の理由である。

---

\*工学部 建築学科 教授  
2004年6月15日受付

## 1. 港町としての長崎

長崎は港町である。それも海外交易のために開かれ、以後長年にわたってそれで以て栄えてきた特異な港町であった。つまりそういう意味で、典型的な「港市」<sup>1)</sup>といえる。しかも事柄は経済活動・商行為としての貿易にとどまるものではない。むしろそのことに随伴し併存した異文化・異文明交流の接点、またはそれらの流入・流出の窓口としてあった、そのような港町としての長崎が着目されているのであろう。

したがってそこを対象としてその建築や都市を問題にすることは、自ずとそれらがどのように海外と関係していたのか、その諸相を探ることとほぼ同義になる。同時にそのことが、わが国の建築や都市の歴史にどういう影響を及ぼしたか、あるいはそれを扱う当該史学にいかなる刺激なり示唆をもたらすのか、この点を考えることにもなるのであろう。

大正八年(1919)「十月三十日。夜古賀十二郎氏の「長崎美術史」の講演を聞く」として、当時長崎医学専門学校教授として長崎に赴任していた斎藤茂吉は、次の一首を詠んでいた(同全集第1巻『あらたま つゆじも』より<sup>2)</sup>)。

くわふん  
南蠻繪の渡来も花粉の飛びてくる  
おもむき  
趣なしていつしかにあり

また翌九年「五月二十四日。大概如電翁を迎へ瓊林館にて食を共にす。會者古賀十二郎、武藤長蔵、永山時英、奥田啓市の諸氏及び予」としては、次の一首を残す。

ちゅうしん  
シイボルトを中心とせるのみならず  
やうがく みなもと  
なほ洋學の源とほし

すでにこれから数えても一世紀近い月日が流れている。美術史においては、あるいは洋学史や科学史においては、長崎が果たした歴史的役割はも

はや十分明らかにされているのかもしれない。少なくともそれなりの意義は深く認識され、当該分野の常識として共有されるに至っているのであろう。しかし建築史や都市史においてはどうか。おそらく、それがまだ不十分かもしくは不明なるがゆえに、ここで改めて問われようとしているに違いない。

むろん現時点で、これに即答することも、また十分な見通しを与えることもできない。遺憾ながら筆者にはその能力も準備もない。しかし設定された本日のシンポジウムの標題、そして筆者に与えられた主題「海から見た長崎の建築・都市」の意図は、概略このように理解してよいであろうか。もしそうとしてよいならばだが、これについて日頃より関心しているいくつかの事柄をいまいし掘り下げ、それを問題提起することによって、一応の責務を果たすことにしたい。

以下、大体年代順に取り上げていくことにする。

## 2. 長崎の開港と町建て

### 2-1 開港以前

長崎が、ポルトガル船の来航する以前どのような状況であったかは、同時代的史料を欠いていて詳しくは分からない。しかしそれより一世紀以上ものちの地誌類には、ほぼ一致して次のような記述が見える。

長崎、昔は深江浦とて、片田舎にて世上知者稀なり。然処、文治之比、頼朝卿より長崎小太郎と云者、此深江浦を給ふ故数代住居す。彼小太郎深江を興立するに随て、商船等近郷へ往来、然は於所々長崎者と申、終には深江の名を唱失つて、長崎といつともなくいへり(『長崎根元記』より)

いわば地名起源説話の域を出るものではなく、これをそのまま信じることはできない。しかしこの小太郎の後裔という長崎甚左衛門なる地頭の人物が、戦国末期、キリシタン大名大村純忠の支配下において、現市街の東部にある春徳寺の裏山に城

館を構え、その膝元の桜馬場・夫婦川町一带に小城下を形成していたということは、諸史料から確実視されるところである。そして1569（永禄12）年の終り頃、その長崎氏の庇護のもと、長崎で最初の教会「トードス・オス・サントス（諸聖人）」が春徳寺の地に建てられたという<sup>3)</sup>。また長崎港の入口の東南側に位置する深堀には、諫早・西郷氏や佐賀・龍造寺（のちの鍋島）氏と通じる深堀氏が割拠し、長崎氏と拮抗していたことも知られる。それゆえ、長崎の深い入江が以前から何らかの港町であったことはまず疑えない。たとえ「片田舎」の無名な寒村だったにしてもである。

## 2-2 開港と当初の町建て

しかしもちろんこれは、ここで問題にする港市・長崎の前史でしかない。長崎の公的な開港は、たとえばルイス・フロイスの『日本史』には次のように記されていた。

ところで〔長崎の西郊にある〕福田の港は適当でなく、定航船はそこでさまざまな危険に曝されたので、司祭はそれに代る、より安全な港を探し、ドン・バルトロメウ〔大村純忠〕の領内に留まっていた、それによって布教が援助され保護され得るようにしたいと望んだ。そこで司祭は数人の同行者とともに一人の水

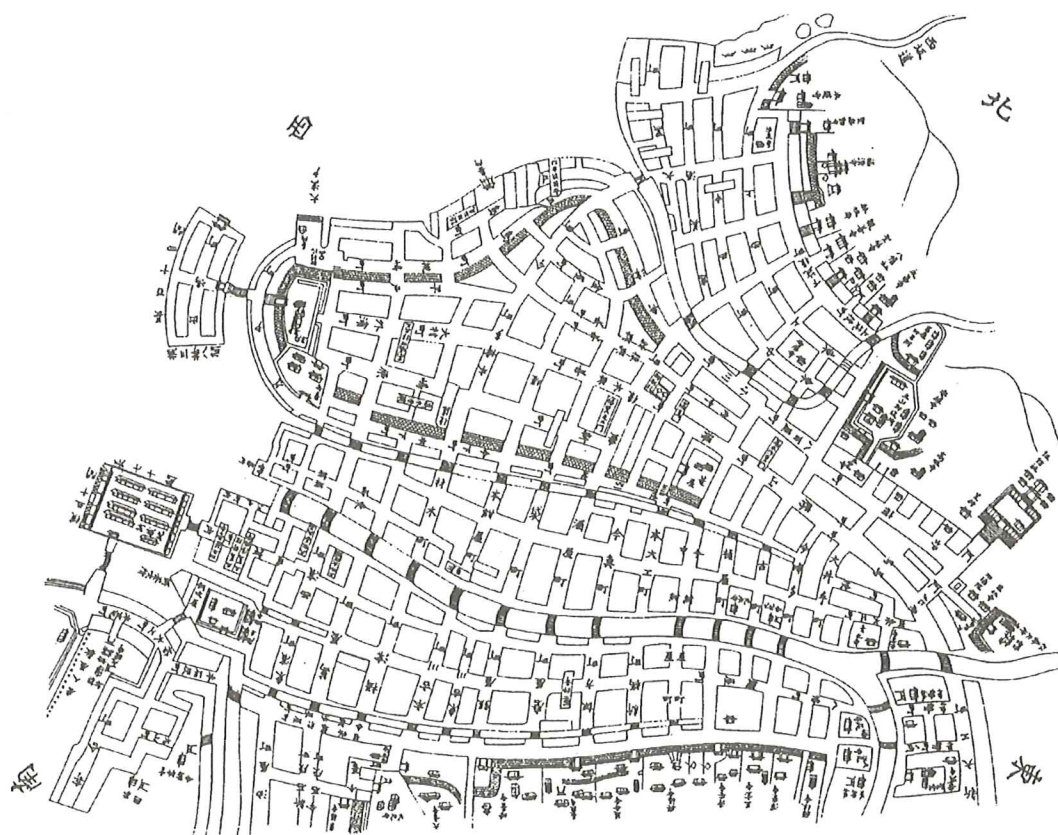


図-1. 江戸中期の長崎市街（長崎市役所編『幕府時代の長崎』1903年、所収）



先案内を連れ、彼らとともにかの海岸のいたるところ廻り、港口の水深を測量して、一番よいと思われるところを探すことにした。その際、彼らは、長崎の港が（自分たちの意図に）もっとも合致し適していることを認めた。そしてドン・バルトロメウとの必要な協定を行なった後、司祭、および定航船の援護のもとに家族連れで住居を設けていたキリシタンたちは、その（長崎に）決定的で確乎とした定住地を創設し始めた。

（松田毅一・川崎桃太訳、邦訳本第9巻第24章、〔 〕内は引用者）。

ここには紀年の明記はないが、日本側の地誌類にはそれを一致して元亀元年（1570）のことだったとする。そして翌年の「元亀二年辛未、大村理専家来友永対馬と申者、見分の上、町割仕候」として「嶋原町、大村町、外浦町、平戸町、文知町〔後外浦町ニ加ル〕、横瀬浦町〔後平戸町ニ加ル〕」の6ヶ町を上げ、「右六町之分初て町割仕候由」（引用は『長崎集』、この場合の〔 〕内は原文割注を示す）とするのである。すなわち町建ての当初は港湾内に長く突き出た岬〔これが「長崎」の由来とされる〕があり、その高台の先端近くにまず6ヶ町のみが町建てされ、それは「高岸ノ下皆総堀トシ、東北地並ノ方モ六丁町限ニ堀ヲ堀テ総堀ニ続ケ要害嚴重ニ構ヘタリ」という状態であったが、「其後本博多町ヲ建テ、其限ニ小堀ヲ堀リ、又此堀ヲ埋テ堀町ヲ建テ、段々町ヲ建増メ豊後町限ニ堀ヲ堀リ、又町ヲ建増メ桜町限ニ堀ヲ堀リシ故へ、（中略）其後六丁町岸下ノ総堀ヲ埋メテ五嶋町・樺島町・江戸町ヲ建、猶又建増メ文禄ノ頃ニテ都合二十三町ト成ル。是地子御免除ノ定数ナリ」（引用は安野氏所引『長崎実録大成補遺』による）というように、次第に同心円的に拡張されていったというのが、長崎市街の中心をなす「内町」の形成に関する江戸時代以来の通説であった（図-1参照）。

これに対し安野眞幸氏は、『長崎根元記』に「則元亀二年に町割をなし、国々より集まる所の名によせて、其集る所の者は一所に置、或は豊後

町・大村町、或は平戸町、或は五島町などと名付、町之頭人を定」とあるように、豊後町や五島町が元亀2年当初からのものだったとする異説のあったこと、加えてそれが「彼等〔長崎の町建てに参集したキリシタンたち〕は、あるいは島原より、あるいは志岐・五島・平戸・山口・博多などより、あるいは諸国より来れる者であった」とするフロイスの記述とも矛盾しないことから、6町の外に位置する博多町・豊後町・五島町そして樺島町なども当初から存在したのではないかとする新見解を提起されている<sup>9)</sup>。そしてそこに町建て当初の「ミニチュア版の内町〔6町〕と外町」が想定されようと説かれるのである。後段はあたかも『大村見聞集』所引「大村家記」に、のちに教会領となり次いで公領となる地区も「内町六町」とするのに従ったかつての古賀十二郎説<sup>9)</sup>を、形を変えて再生した趣きがないではない。だが、果してどうであろうか。

まず、最初の町建てが6町に限定されるのではなかったろうことは、例えば安野氏は触れられていないが『長崎拾芥』にも「元亀貳年大村利仙家頼友永対馬と云者を遣し町割を定る所に、諸方より集りし商人或ハ浪人等望に随ひ是を渡す、尤も国々の者共一所に集り一町を取、大村より来る者は一町に住して大村町と名付、嶋原・樺島・外浦の者共居住して銘々其生所を取て名之。如此貳拾町余取立」とあることからして、十分首肯されるところだと考えられる。但し「貳拾町余」がすべて元亀2年に成立したのではなく、当然そこには多少の時差はあったろうとしてである。しかしとりわけ樺島町・五島町の2町は、フロイスの記述や上引の地誌類、そして倭寇時代からの関連性や後述するその場所柄からしてもほぼ同時だったかともておきたい。

## 2-3 内町と外町

次に、安野氏は6町が当初の内町で、それ以外が外町だったが、次第に内町に編入されていったというように、そこに外町の内町への転換による

内町の拡張過程が歴史的に実在したと推定されるのだが、この点は疑わしく思われる。例えば同じく『長崎拾芥』には、

文禄元年に奉行として寺沢志摩守を指下さる。其比町の頭人四人在り。志摩守赦之町年寄と名付、此時町数貳拾三町に極る。其比迄は今の外町は田畠にて有しを慶長貳年に田畑をひらき先材木町、本紺屋町、袋町、酒屋町此等の新町を立、御朱印地の外なるを以、外町と名付、故に右の貳拾三町を内町と名付、夫より内外とハ分る。

とあるように、「御朱印地」（公領）の外なるがゆえに後世「外町」の名がまず生まれ、それと対の名称として「内町」なる名ができたとする方がはるかに自然だし、また事実このように史料上にも裏付けられるところだからである。したがってこの意味では、内町・外町なる対・称は安野氏に反して、「これは一般に「古町・新町」に当たる」とした豊田武氏らの旧説を否定するには及ばないと考える。すなわちこの点に関しては、6町以外ものちの外町に対してはもとから内町だったと解するわけで、通説を出ないことになる。

## 2-4 6町の性格

が同時に、当初からその6町が特別視されていたらしいことはやはり疑えない。したがってそれが最初の「内町」だったのでも、またそれだけが当初の町ではなかったにしても、何らかの性格づけを帯びていたことは十分考えられる。この点を強調されたのが安野氏の功績というべきだろうが、安野氏はそこが「ポルトガル商人を寄宿させる特権を持つ「船宿」の町であった」と推測される。それゆえにそこだけが要塞化していたのに対し、それ以外の防備がない「外町」はむしろ「日本各地から貿易港長崎にやってきた「諸国商人」の町」だったのではないかと、とする大変興味深い見解を示されていたのである。

この新説の当否を判断する材料は持たないが、一方で何か釈然としない気持ちが残るのも事実である。

まず史料的にみると、6町の岸〔崖〕下に当初は「総堀」があり、のちにこの総堀を埋めて五島町・樺島町・江戸町を建てたとするのは安野氏が依拠する『長崎実録大成補遺』に限られるようで、どうもこれは城下町などの趨勢を踏まえた後世的な仮託ではないかと疑われる。元来、これらの町の外周は海なのであるから、そこにもとは総堀があったというのも変だし、また逆に奥行きのない陸地の内側にわざわざいったん堀割を開削し、それをのちにもう一度埋め戻したというのも想像しにくいところであろう。それに少なくとも五島町や樺島町は元亀2年の同時か、殆ど遅れることなく成立していたとする上記推定が正しいとすれば、その時間的余裕もないことになる。ましてや、そのあいだでの変更を推測させる理由も見出し難い。

それゆえもしこう理解してよいならば、6町は高台ゆえ斜面には石垣を築き、陸続き側にも何らかの外郭を形成していただろう（よくいわれる三つの堀は後述のようにもう少し後世の造成かもしれない）とはいえ、要塞化はそれほど極端ではなかったことになろう。つまり、仮に（本）博多町や豊後町は元亀2年より少し遅れて成立したとしても、五島町や樺島町とは上下の違いはあるにせよ最初から地続きだったのではないかということだ。それに地勢からすると、いずれにせよ入港したポルトガル船はその付近に停泊せざるをえまい。とすれば、元来、そこを経由せずに6町のある高台へ接近することもできないのではないか。つまり空間的にも、ポルトガル商人とこの両町の人々の接触を遮断するのはかなり困難だろうということである。

とするならば、いま確定的な解釈は到底できないが、6町の特性和は安野氏の想定とはやや位相がずれて、つまり「船宿」の区別といった物理的性格ではなく、もう少し緩やかないわば経済特権的なものではなかったかと思われる。すなわち以前からの実績や特約、あるいは町建てを後援した領主たちの意向を帯して、ポルトガル人たちと交易する権利を独占的に持っていた有力商人たちが居住する町、といった程度にである。



しかしそれでもその特権を護持するためには、要塞化し自衛的な兵力を常備することも必然だろうと思われる。第一に守るべきは、独占的に交易する権利を有する自身たちとその居住場所、そしておそらくはそこに運びこまれるであろう商品にはかならないからである。

## 2-5 水夫町としての樺島町・五島町

一方、もちろんいずれの側にもキリシタンが多く含まれていたであろうが、6町の下に位置する五島町や樺島町は船荷を運搬したり、航海用の物資を調達したり、さらには船を防禦したり修理したりといった形で、6町とポルトガル側双方の商行為を支える役割を担っていたかと考えておきたい。つまりは水夫町としてあったのではないか、ということだ。のちの地誌類においても、内町・外町それぞれに「船手町・陸手町」の区別があり、すでに26ヶ町となっていた内町でみると、陸手は島原・大村・平戸・外浦・本博多・堀・引地・新・豊後・桜・本興善・新興善・後興善・今・内中の15町、船手は江戸・本下・今下・東築・西築・樺島・本五島・浦五島・船津・小川・金屋の11町とする。この中で金屋町のみが例外となるが、他はすべて高台の上と下で区別されていたのであった。すなわち、これが当初からの遺制だろうと考えられるのである。ただもしかすると、この樺島・五島の2町はポルトガル船と中国船を役割分担するために並べられていたのかもしれない。

しかしいずれにせよそれゆえに上下両町とも最初から内町だったのだろうし、また次々と同様な有力商人たちが寄集してくれば陸続きの方向へ6町を拡張し、そのつど陸側の外郭としての囲いを前面に築き足していったのではないかと推測されるのである。さらに、当初からポルトガル商人と諸国商人の船宿が、内町と外町という形でないにせよ区別されていたかどうかは不明だが、船着場の方は海上での密貿易を避ける意味で何らかの分離が要るとすれば、日本船向けの場合としては五島町より裏手へ迂回した舟津・小川町あたりで

はなかったかと推量しておくことにする（補注2）。

## 2-6 岬の教会

がしかし、ここで本当に注目したいのは以上に長々と検討を重ねてきた事柄そのものではない。元龜2年当初の長崎の新しい町が実際どこまで形成されていたかはなお不詳としても、むしろここで形成された新都市の空間構成的あるいは全体の景観的構造をこそ注視したいのである。

すなわち、まず岬の高台となった地区に6町（と次第に加増した数町）があり、その周囲には現在でもその遺制が確認される崖や石垣が巡り、そして陸続きの前面にも何らかの囲いが作られていたのであろう。一方、ポルトガル船が停泊する側の海辺には樺島町や五島町などが石垣の下にへばりつくようにそれらを取り巻いていた。しかし一層大切なことに、実は上述では何ら触れてこなかったが、6町の港口側すなわち岬の高台の先端に当たる区域が以上のほかにあり、そこも含めた高台全体がいわば要塞化していたのであった。この先端地区はまだ町名も持たなかったようだが、そこにはどうも最初からキリスト教会堂が建てられていたようなのである。

そして、この長崎の町と郊外の茂木村はその後、天正8年(1580)に大村純忠・喜前父子によってイエズス会に寄進されたのだが、それを機に岬の先端にあった最初の小さな聖堂はより「立派な教会」に建て直されたという。この岬の教会はそれ以後も曲折を経るが、最終的には「被昇天のサンタ・マリア教会」として「日本では一番大きくて美しい」大聖堂となり、秀吉が長崎を公領とした天正16年(1588)以後も存続し、慶長19年(1614)末の取壊しまで生き延びたというのであった<sup>6)</sup>。

天正年間に執筆されたヴァリニャーノの『日本巡察記』には、この当初の長崎の町の様子について次のように記していた。

第一の修院は長崎にある。この地は優れた安全な海港であり、数年前、我等イエズス会員の努力によって、異教徒の領主に迫害された

キリスト教徒の四百軒の家屋から成る海浜の町が造られた。(中略) 周囲がほとんど全部海に囲まれているほど海に突き出している高い岬があるので、この長崎港はよく保護されている。陸地へ続く方面は、要塞〔石垣〕と堀によって強化され、この岬の先端に我等の修院があり、それは町の他の部分から離れて要塞のような状態になっている。

キリスト教中心の描写には注意を要するが、ともあれこのように海に突き出た岬の先端部分に教会堂をいただく「修院」があり、それ自体もまた要塞化され隔離された聖域を形づくっていたことは疑えないであろう。しかもそこは、実は単なる聖域にとどまるものでもなかったようなのだ。すなわちつとに高瀬弘一郎氏が明らかにし、安野氏も追認されるように、イエズス会士が通商を仲介し代理する「生糸の取引所」つまりは交易の市場でもあったと想定されるのである<sup>7)</sup>。それゆえその前にはいわば門前町としての6町が展開し、そしてそれらの周りには城塞的な構えが施され、さらにその外周の海辺には文字通りの下町が取り囲んでいたということになる。

この前段だけならば寺内町に似ていなくもないだろうが、しかしそれでは石垣や堀の外側の町がうまく説明できないのではなかろうか。安野氏はそれゆえそこに、中世後期の「城下町」を当てはめて「内町・外町」の歴史的再解釈を提起されていたのだが、これの従いえないことは前述したとおりである。ならばどう理解すべきなのか。

筆者の現時点でも結論を端的に言えば、むしろ安野氏も「長崎の景観に関するヴェリニャーノの記録から得られるイメージは、ペルシャ湾の入口にポルトガル人が建設した「ホルムズの要塞」の絵と一致する。当時ポルトガル人はどこでも、同じような要塞のある町を建設したのであろう」と指摘されるように、長崎の町建て計画はポルトガル人が主導したとみてよいのではないか、ということだ。大村氏の家来・友永対馬が地割をしたのは地誌類でも門前の6町に限定されていたことも、これと矛盾しないであろう。むしろ確実な証拠が

なく、それにまたしても「日本の歴史の中にヨーロッパを発見する」(安野氏)という日本中世都市史研究の旧習に囚われたとの誹りを恐れないではないが、しかしこの場合は観念的方法論としてのそれではなく、長崎ならではの特殊具体例としての可能性を敢えて探っておきたいと考えるのである。

## 2-7 町建て当初の長崎の都市構造

さて、当初の長崎の町の成立を以上のように理解してよいならば、この段階での都市の構造を平面的な図式として示すと図-2のようになる。

海に突き出た岬の高台には、その先端部に教会を中心とした聖域があり、その門前には特権的な6町(とそれに続く数町)が並び、これらを取り囲んで石垣と崖、そして陸続き側には何らかの囲いが巡らされて要塞化していた。しかし入港してきた内外の船舶が停泊または着岸する海側には、樺島町・五島町・舟津町などが、要塞北西側の石垣下に細長く带状に張りついている。他方、要塞の南東側は中島川の両岸に早くから田畑が営まれていたかと思われるが、その河口部の方はまだ遠浅の海が湾入していて、少し大きな船ならば直ぐに座礁してしまいそうな浜辺をなしていたかと想像される。

一般に、この町建て当時でも、中島川の流域はまだ海の中だったと想定することが多い(『長崎市制六十五年史』の挿図はその典型である)が、これは疑わしいであろう。のちに外町としての「浜町」ができるが、この町名はそこが浜、つまりそこまで陸地化していたからにはほかなるまい。そして、この東南側の石垣の下には天然の小さな川筋(のちに地獄川と呼ばれる)を利用した掘割があったとは一応考えられなくもない。のちに内町が23町にまで拡張されるが、その中にはこの石垣下にへばりついた本下町・今下町・引地町が含まれていた。つまりこれこそが実録大成補遺にいう「総堀を埋めて」新しく建てた町ではなかったか、と思われるのである。



しかしいずれにせよ最も大切なことは、岬の先端の聖域は陸側からみると文字通りその果てとなる端部でしかないが、しかし周囲の港湾内の海を含めた全体が港市・長崎だとすれば、そこはまさしくその中心に位置した核的存在だったということである。そしてこの港町からはもちろん港外の外国や国内諸国に通じる太い「海の道」が延びていたのはいうまでもない。

一方、陸の方面へは昔から何らかの道筋がなかったわけではなかろうが、少なくともそれらは要塞前面の人工・自然の囲いによって都市内への交通は遮断されていた。すなわちこの段階では、「陸の道」は開通していなかったということである。しかし同時に、この港市から程近い郊外には長崎

氏の小城下町があり、そしてその中心には岬の教会に先立つトードス・オス・サントス教会があった。両教会はおそらく互いに見えていただろうし、また両教会からは港が、つまりそこへ出入りする船が見えていたろうことは現状からも確かめられる。以後、長崎の町はこの両教会のあいだに展開し、成長していくのは誠に興味深いところだと思われる。

### 3. 近世都市・長崎の形成と出島の築造

#### 3-1 教会領から公領へ

当初の町建て部分に思わず手間取ってしまった

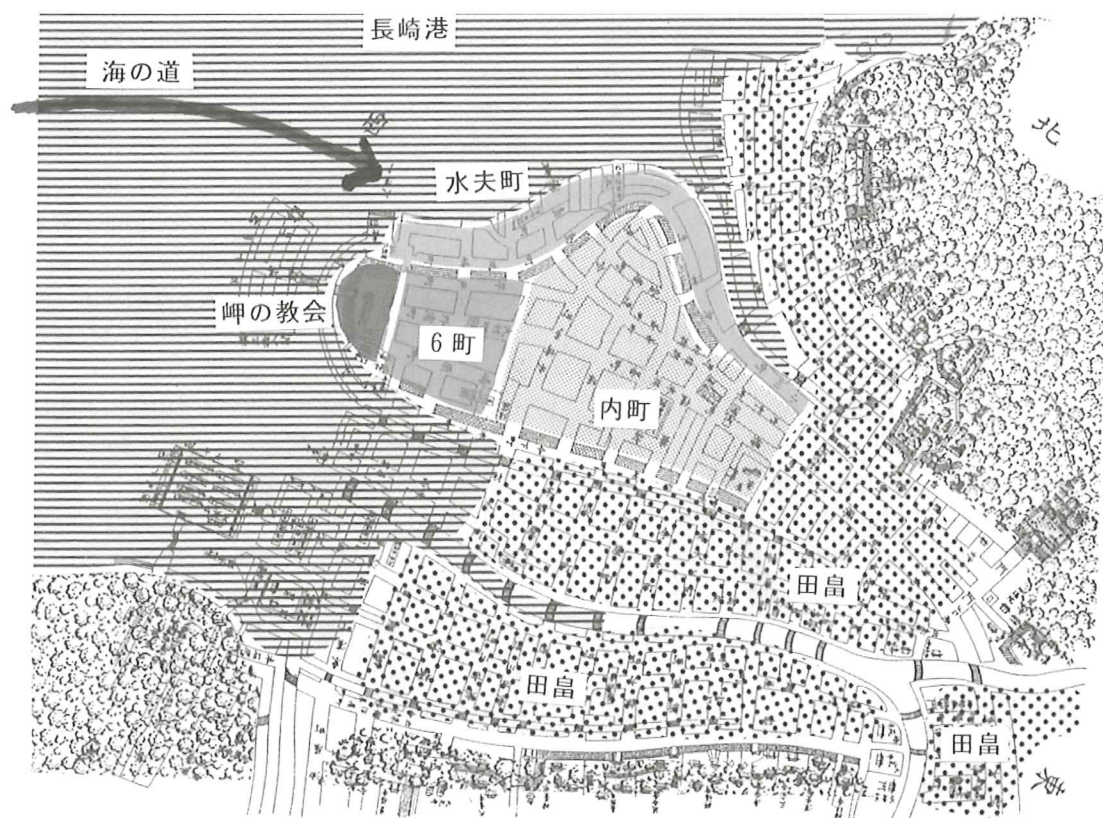


図-2. 長崎の町建て当初の都市構造平面概念図



が、次に江戸初期の鎖国が完成するまでの期間を辿っておくことにする。

まずすでに前記したように、町建てされたばかりの長崎の町は交易によって急速に繁栄していくが、当然その利権の支配を巡って佐賀・龍造寺氏を中心とした勢力からの干渉を度々受けることになる。これを避けることを主目的として、あるいは高瀬弘一郎氏の指摘されるように一部は「借金返済の意味を含ん」で<sup>8)</sup>、領主大村氏父子は天正8年(1580)に長崎の町をイエズス会に寄進した。すなわち「吉利支丹奇観〔キリスト教会〕の知行所とハ也にけり」(長崎縁起略)というわけである。

これによって長崎は一層「キリシタンの町」としての性格を強めたであろうこと、それゆえに諸国で迫害されたキリシタンたちはそこに安住の地を求めて逃亡してくる機会が増え、また貿易の利潤を求めて寄り集まってくる人の数も少なくなかったであろう。しかもそれは日本人だけに限られるものでもなかろう。東シナ海に面した長崎には、当然中国をはじめとする東南アジアの船も早くから来航していた筈であるから、それらの中には長崎に居住し始めた人達もいたことと思われる。

しかしその利潤の殆どが教会領ゆえに地子銀までもがイエズス会側に収奪されている状況は、九州平定を終えたばかりの秀吉にとっては到底容認し放置しうるところではなかったに違いない。事実、その帰途博多で天正15年(1587)6月にはまず伴天連追放令を発し、そして翌16年(1588)には遂に直轄領に改めたのであった。こうして公領となった長崎ではあるが、同時に地子銀は免除する厚遇を与えていたように貿易を縮小する意図は全然なかったから、町の発展傾向は以後も引き続いたであろう。つまり町はいよいよ拡充し、「文禄元年(1592)に〔代官鍋島直茂の朝鮮出兵に伴い、初代〕奉行として寺島志摩守を指下さる。其比、町の頭人四人在り。志摩守赦之町年寄と名付。此時、町数貳拾三町に極る」(長崎拾芥) こととなったわけである。

### 3-2 奉行所の位置と大波戸の創設

しかしここで都市構造の観点からみて興味が惹かれるのは、この時に奉行所が立てられた場所が本博多町だったという点である。すなわちそこが内町のほぼ中央に当たるだけでなく、岬の先端の教会聖域とその門前町たる6町のまさに前という位置だからだ。つまり都市の全体を管轄すると同時に、ポルトガルとの交易にも睨みを効かせるに絶好の位置だろうからである。

また上引のように当時、町の頭人が4人だったということは、当初の6町のうち横瀬浦町と文知町は実質的には早くもそれぞれ平戸町と外浦町に併呑され、そこはすでに4ヶ町になっていた可能性も高いであろう。ふつうこれはその後のキリシタン史料になおも文知町の名が出ることから「17世紀前半」頃と解されているが、もう少し早まるのではないかと考えておきたい。さらにその4町の頭人たちが町年寄と名付けられたことは、奉行を頂点とする公領行政の枠組みに組み入れたと同時に、他方ではもはや奉行所の管轄下ではあるとしても、なおも外国と交易する権益を優先的に保持していたことが窺えもしよう。

さてこのように、ポルトガル交易を奉行所が管轄するようになったことは、「大波戸」の創設によっても知られる。

すなわち、『長崎実録大成』『大波戸之事』には、「文禄ノ頃ヨリ此所ヲ船着ノ波止場ニ定メ、石垣ヲ築キ地形ヲ均シ番所ヲ建、寛永ノ初年ニ至リ船手ノ町々ヨリ下役ヲ出シ、異国船着津ノ度々御奉行所ニ注進セシム」とあるように、大波戸は外国船をその近くに限って停泊させるために、その時点で奉行所によって新たに築かれ、そこには出先機関としての番所が設置されていたからである。先に推定したように、おそらくはそれ以前からもポルトガル船は樺島町の前面あたりに停泊していたのであろうが、以後は奉行所が管轄する大波戸地先への着津に限定されて管理が強められた。つまり位置的にもまさにそうなのだが、岬の先端の聖域と樺島町の間に公権の楔が打ち込まれたとい

うにはかならない。また上引の後段は、さらに30年余を経た寛永期の初め頃になると、それまではまだ当初からの特権で水夫町としての利潤を得ていた海辺の町々に対しても、船手町としての公用諸役を負担させるかたちで、支配下に再編したことを意味するであろう。

しかしその前に、慶長・元和年間の動きを見ておかねばならない。

### 3-3 外町の形成と都市の再編成

まず慶長2年(1597)には、前引のように公領の外側に文字通り「外町」が形成され始める。これはもちろん一つに、なおも増え続ける人口に対して新しい市街地を開拓し提供することではあろう。『長崎実録大成』に「逐年諸方ヨリ来集テ住居ヲ願フ者多ク成シ故、慶長二年以来田畠ノ地ニ町割有之、元和ノ初ニ至リ四十町出来シ、定免ノ地子銀ヲ上納セシム」とあるのが、それに当たる。

が、これは他方で、都市長崎の再編という側面を有していたのではないかと考えられる。すなわち外町はその各町名からも推察されるように、その多くが貿易とは直接結びつかないふつうの商人地や職人地であったとみなされる。しかし元来、そうした商人や職人たちがそれ以前の長崎に居なかったなどとは想像できない。そのような人々が全く存在しない都市というのは、まずありえないだろうからである。したがって外町の住人たちは、あとから長崎に流入してきた人達だけでなく、むしろ過半は内町から移転させられたのではないかと推測されるのである。

公領としての内町が御朱印地とも言われるのは、前述のようにそれと同時に地子銀免除の御朱印状が下付されていたからであった。とすれば、このように内町から外町への移住をいうことは、一見抵抗の想定されるところと思われるかもしれない。しかしもとより税は地子に限られるものではない。未だ典拠史料の再確認はできていないが、安野氏は「長崎町割当時、「内町から四百貫」という記録がある」という。安野氏はこの額を地子銀と解

されていたのだが、これは多分すべての税の総額かと憶測される。一方、外町の地子については「外町五十四丁之地子銀、末次平蔵支配之時分迄は、三十八貫八百五十匁一分五厘七毛上納」(長崎根元記)というから、桁外れの少なさだったことが確かめられる。つまり、内町には当初から交易の利潤に見合ったより多額の収益税が課せられていたに違いないし、逆に外町に出ればそれより小額の地子税だけで済むという利点があったのだろう、ということである。

次にこの外町は、慶長10年(1605)に大村領から換地のうえ公領化された<sup>9)</sup>。前引のように外町の町数は元和の頃までに40町になったというから、まだこの時点では内町と同じく20町程度だったかと思われる。しかし約20年間で40町であるから、毎年2町づつ増えていくという成長ぶりだったことが分かる。

外町の位置からすると、一つは中島川の川筋を挟んだ兩岸に商人町・職人町としての新町が形づくられていったことが推定される。これが内町の東南側に広がる外町であるが、一方北側の外町は一部は海辺を埋め立てたかもしれないが、その地勢からすると郊外の斜面地を市街地化したかのような趣きである。むろんどちらにおいても、それは市中周辺に形成されていた「田畠」を転用していったとみてよいであろう。でなければ、「田畠高八百三拾四石餘ノ地ニ町数四拾町出来シ」(長崎実録大成)のように石高を言う必要はないし、また公領とするに際して換地の意味もなさないだろうからである。尤もその換地後も外町は膨脹していったわけだが、この点は外町と同時に周辺に位置する「郷」3ヶ村も公領化されていたので、税金上の問題はない。ただ田畠がどんどん市街地化していったばかりである。

### 3-4 教会群の破壊と寺社地の形成

こうしてこの慶長年間の市街地はすでに公領として長崎奉行の支配下にあったが、それでもまだ「キリシタンの町」であった。先に触れた岬の教



会やトードス・オス・サントスのほかにも、市中とその周縁だけでも10余りの教会が建てられていた<sup>10)</sup>。

それゆえ奉行を頂点とする近世都市・長崎が形成されるのは、それらの教会群が慶長17年(1612)に発せられた幕府のキリシタン禁教令にもとづき、同19年に過半を、残りは元和5年(1619)に悉く破壊したのち、両外町の周縁部に寺社地を定めたいことを待たねばならない。

事実、地誌類によれば、そこに立地した主要な寺社は慶長19年の大光寺を筆頭に、元和3年の大音寺、同4年移転の皓台寺、同5年の本蓮寺〔以上3寺がのちに長崎の三大寺となる〕、同9年(1623)の興福寺・三宝寺、寛永元年(1624)年の諏訪社〔現・松森神社の地、現在地遷座は慶安元年(1648)〕、同4年の清水寺、同5年の福濟寺、同12年(1635)の崇福寺などと続く〔年代については諸説あるが、ここでは長崎根元記による〕。むろんこれ以外の市中や市外に寺社がなかったという意味ではない。しかしともあれここに、城下町に代表される近世都市としての長崎がほぼ確立していたのを見届けることができよう。

すなわち、まず城に当たる奉行所を高台の中心に置き、それを囲んで有力商人たちの町人地が同じく高台に位置する。もちろん長崎は城下町ではないから、中心部に広大な武家地が占めることはなかったであろう。しかし奉行所がある以上、それが全く無かったとはいえない。史料上には確かめられないが、奉行所がある本博多町の前にあった小堀を埋めて町となしたという堀町から新町・桜町にかけては、その位置と名称からしてあるいはそうであったかと思われもする。一応の仮説として掲げておく。

そしてともあれ、これらの周りにある石垣下に水夫町などの下町が取りつく。以上が内町で、その外側、海でない三方を職人地・商人地としての外町が巡り、この外町の外周部、つまり周囲の山際には寺社地が取り囲んで外縁を固めるという同心円的な配置構成である。

また、『長崎拾芥』には「文禄元辰年、嶋原町・

本博多町の境に大堀を掘る。其内に又同年に小堀を掘る。此小堀ハ埋て今の堀町是也」とするのをはじめ、豊後町・桜町境の堀および桜町・勝山町境の大堀は慶長元年の造成、そして「慶長五子年、内町と外町の境に要害として北より西ハ小川町筋より船津町迄堀通し、東より南は〔桜町の〕竈屋〔牢屋〕の下より下町迄堀通す。依之、堀之内迄は内町の分也。此時奉行寺沢志摩守、町年寄に命じて内町の人夫を以是を掘ると云」とする記事がある。ふつうこれらの掘割はもっと以前からあったとみなされているので、あまり重視されていないが、しかし時代の相対的な新しさからすれば一定の史実性を認めてもよいのではないかと考えられる。仮にそれらの一部は前代からのものを改修したにすぎないとしてもである。

とすれば、これらの掘割は奉行所の周りに始まり陸続き側に計3～4重、そして内町・外町境にも1重巡らされていたことになる。まさに細部までが城下町と同様な構えといえよう。これを主導したのが奉行自身であり、かつ内町の分は外町の造成が始まる前で、内町・外町境はその造成が始まってからという点にも、公権の強い意思を感じることができる。

しかしながら実は近世都市・長崎がこれでもって完成したわけではない。そこに港市としての長崎の特殊性があると考えられる。

### 3-5 森崎権現の創立と奉行所の移転

『長崎実録大成』の「御奉行御屋敷之事」条には、以下の記事がみえる。

文禄元壬辰年ヨリ寛永九壬申年迄四十余年ノ間ハ、御奉行御一人ニテ、御役屋敷ハ本博多町ニ有之。寛永十年曾我氏今村氏兩人御奉行被蒙仰ニ付、右ノ屋敷ヲ二ツニ分テ兩屋敷ト成ル。然ル処其年今村屋敷ヨリ出火ニテ、隣屋敷其外五六町焼通り、今ノ西屋敷其頃ハ江戸・大坂糸割符宿老会所ナリシニ、此屋敷モ類焼セリ。仍テ西屋敷ノ地ニ御役所二ヶ所被建、本博多町ノ地ヲ宿老共替地ニ被相渡之。

この記事からまず、寛永10年(1633)までにもと岬の教会があった区域が糸割符宿老たちの会所となっていたことが知られる。何時からかを確かめる史料はないが、すでに多く説かれているように慶長19年(1614)の教会取り壊し直後だとみて誤りないであろう。すなわちイエズス会が管轄していた「生糸の取引所」に代わって、慶長9年に成立していた糸割符制度にもとづく宿老たちの会所がそこに建設されていた、ということである。

しかしこれを「この時点で、「生糸の流通センター」は宿老たちによって乗っ取られた」(安野氏)と解するのは、主体を見誤っているのではないかと思う。すでに多くの研究蓄積と厄介な議論のある糸割符制そのものについて立ち入る積もりは毛頭ないが、少なくとも安野氏も引く『通航一覧』所引「長崎覚書」に「其頃迄は御屋敷に森崎権現之御社有、又江戸・京・大坂・堺四ヶ所宿老之屋敷在之、権現は諏訪社内に奉移、宿老会所は本博多町御奉行屋敷に替地被仰付、西屋敷御政所に成」とある点は、もっと注意深く読解すべきところだろうと考える。

すなわちこれに関する私見を言えば、まず教会に代わって立地したのは森崎権現社という新しい聖域だと理解されねばならないではないか。一般に地誌類には、この森崎権現は長崎の町建て以前からそこにあったと記すので、これを単なる再興程度に考え勝ちだが、先にみたように長崎市中の主要寺社はすべてキリスト教会破却以後の創建だったことからしても、これもまたその時点での創立という方が史実に近いであろう。そして岬の教会の時分と同じく、その境内に生糸取引に関して特定商人の代表たちが寄り集まって価格・配分等を議するための会所と、そして京・堺〔のち江戸・大坂を加え5ヶ所となる〕から来た者が泊まるための屋敷が設営されていたのであろう。むろん長崎の商人は近くに自宅があるから、会所に参じるのみであろう。そしてこの会所が寛永10年に奉行所と換地されたというわけである。

他方、森崎権現が諏訪社に遷移された時期は不詳だが、『長崎拾芥』には「祭礼の時諏訪大明神、

住吉大明神二柱御輿渡る、森崎権現ハ諏訪の社のうちに御残りまします」として、その理由は寛永12年(他書に11年説もある)にこの御輿渡御〔すなわち今日の長崎くんち〕が創始されたとき、2社分しか神輿作りが間に合わなかったという伝えが記されている。これを勘案すれば、寛永10年より相当遅れることは確実であろう。あるいは諏訪社が現在地に遷座されたという慶安元年(1648)頃か、または寛文3年(1663)の大火後、延宝元年(1673)に諏訪社に程近い場所に立山役所が新設されたときかもしれない。しかしともあれ、これらすべての主体は奉行側にあったとみておきたいのである。つまり森崎権現や宿老会所を教会跡地に設置したのも、後者を奉行所と換地させたのも、残っていた前者をのちに遷座させたのもすべて奉行つまり幕府側の意向だろうと考えるわけだ。でなければ、そうたやすく事が運ぶとも思えないからである。

### 3-6 出島の築造と遊廓の形成

しかしそもそも何ゆえに、換地をしてまで奉行所を岬の先端に移転させたのであろうか。『長崎古今集覧』所引の「拾芥云」には「本博多町御奉行やしき地形不宜故」というが、その真相は何なのか。史料上には何一つ記されていないが、これはそこから一望される長崎港を見下ろすこと、つまりそこに入港する全船舶を監視し、この港市で行なわれる交易のすべてを支配下に治めること、これ以外にまずその理由を見出すことはできないのではないかとと思われる。

そしてこの点は、まさにその眼下の海中に、翌寛永11年(1634)から出島を築き始めたことによって、裏付けられるのではないかと考える。それまで市中に散宿していたというポルトガル人をそこ1ヶ所に閉じ込めるのは、むろん禁教令の徹底ではあるとしても、その場所にわざわざ「俄に築島を申付」(長崎根元記)たのは、彼らとの交易自体を統制しようとする意思の現われとみるほかはあるまい。つまりこれらはすべて一つの構想にも



とづく一連の施策だろう、ということである。

こうして寛永13年(1636)に出島が竣工したときを以て、港市としての近世都市・長崎が漸く完成したとみるのだが、禁教・鎖国政策からすれば結局、寛永16年にポルトガル人の来航を禁止し、平戸でのオランダと長崎での中国に限って交易を許可せざるをえなくなり、出島はその時に空地と化した。しかしその後の平戸でのオランダ商館に対する処置をみるならば、幕府は最初からオランダ商館の長崎・出島への強制移転を目論んでいたことは明白といえよう。それゆえ、これが実現する寛永18年(1641)をもって、鎖国期の港市・長崎の成立をいうことができるかもしれない。

丁度その頃には、「寛永十九年、同〔小島〕村ノ地ヲ開キ、市中ニ有之遊女屋ヲ此所ニ引移シ丸山町ト唱ヘシム」とか、「右〔寄合町〕者、同年同村ノ内野ヲ開キ、市中諸處ニ有之遊女屋残ラス此所ニ引移シ、寄合町ト唱ヘシム」(長崎実録大成)などとあるように、丸山・寄合両町の遊廓が成立してもいた。この点も都市形成上の画期において重要な目印とすることができよう。遊廓は出島のように長崎に固有のものではないが、都市の周縁部における遊廓の形成つまりその計画的な囲い込みは、これまた近世都市の秩序構成にとってかなり普遍的な性向とみてよいだろうからである。

### 3-7 江戸町の造成と鎖国期の都市構造

ともあれこの段階での長崎の都市構造をやはり平面図式として示せば、図-3のようになる。

内町高台の海側の先端に奉行所が位置し、要害化した内町の陸側3方には外町が取り囲む。他方、奉行所下の海辺に内町としての江戸町が張りついているが、この町の造成は実は慶長2年以降の外町形成よりもさらに遅れるのかもしれない。

従来は地誌類の記述からして当然文禄年間以前と考えられてきたが、しかしその町名と場所柄からすると、糸割符仲間に江戸商人が加わるという寛永8~9年頃まで下がる可能性もあるのではないかと思う。中村質氏も指摘されるように、「伝

寛永長崎図」によるとそこには「市中には少ない瓦屋根の町家が集中し、中には長大な倉庫状の建物も見える」<sup>11)</sup>。したがってそこは、当時はまだその上にあった糸割符宿老会所に付随する交易用の施設を増設するために、新たに造成されたのではないか。『長崎拾芥』には内町である築町について、「慶長五年の比迄、今築町ハ海にて有りしを大河筋を通し築立町となし、築町と云」とする伝えを載せるが、これも慶長2年以後における内町加増の事例として、有力な傍証としえよう。ともあれ一応の仮説として記しておく。

また、上述の「伝寛永長崎図」をみると、南側の外町を貫く中島川の下流部をはじめ、小さな川筋にも大小合わせて10近い廊橋群が都市の景観を彩っているのが眼を惹く。廊橋はむしろヨーロッパにもないではないが、これは明らかに中国の影響とみておいてよいであろう。それほどに市中には中国人たちが渡来し、また居住していた証左にはほかならない。これがいずれ興福寺・福濟寺・崇福寺という唐3ヶ寺の中にも、中国色が濃い建造物群として、あるいはそこでの祭礼として着実にこの地に根付き、異国の香りを強く発するようになるのはいうまでもない。

さて、この内町・外町のさらに外縁には寺社が山際を固めていた。奉行所はもちろん海面を含めた港市・長崎のまさに中心に位置する。そしてその真下の江戸町に直面する海中には人工の出島が築かれ、ヨーロッパからの「海の道」はそこを終着点とする。海上から出島を眺めれば、石垣の上に忍び返しの付いた板塀(のちに練石塀となる)が巡るばかりで、正面には入口は見えない。海に開く出入口は大波戸から監視される側面の水門でしかない。しかもこの水門は、貿易品を出し入れする時だけ開かれ、日常は奉行所によって施錠される、厳しく統制された通過口であった。

一方、この段階では奉行所の前から内町・外町を東西に貫き、日見峠を越えていくと最後は江戸にまで通じる長崎街道、そしてその脇道として北へ延びる時津道や古くから南の茂木港へ導く茂木道がある。すなわち「陸の道」も開通していたわ

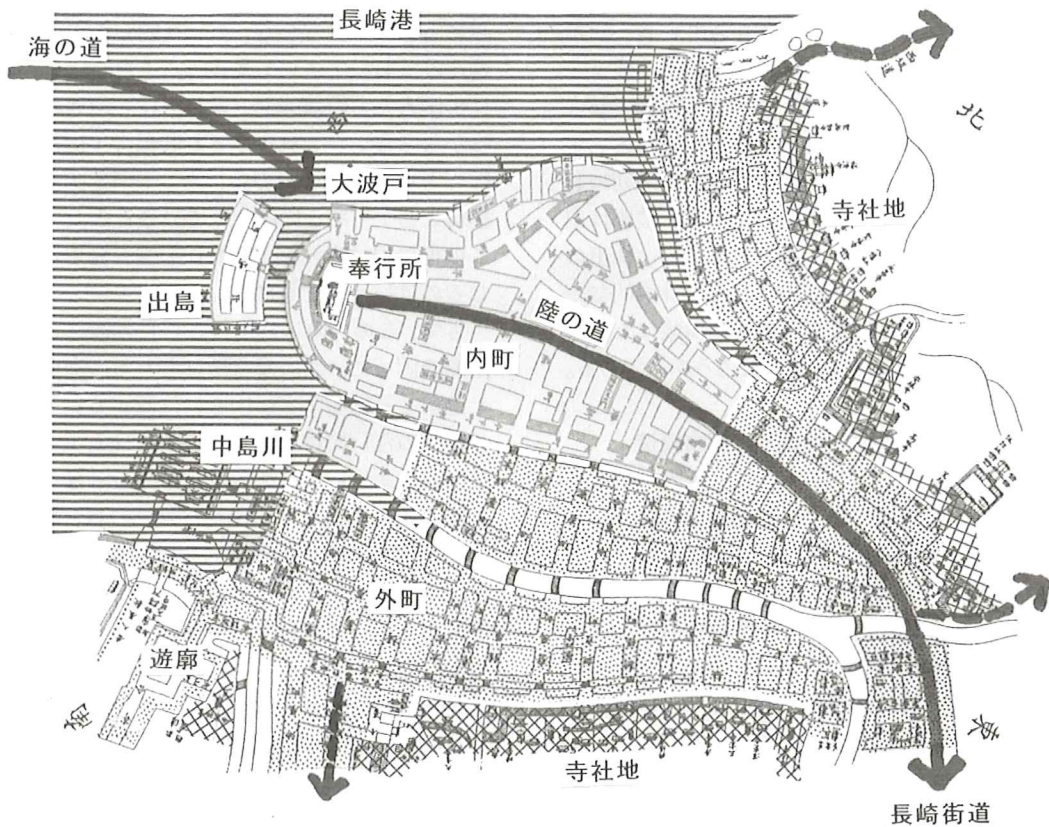
けである。とりわけ最も主要な「陸の道」たる長崎街道の市中における突き当たりが奉行所であること、つまりそこが海と陸の結節点となっていることは注目すべきところであろう。と同時にこの結節点はその通過を許さない、まさに城郭としてあることもである。文字通り鎖国の最先端を担う出城としてあるといえようか。

とはいえ、そこをかすめる形では海と陸は交流していた。一つは諏訪社の祭礼神事「くんち」において、その神輿は先に奉行が造った大波戸に設営されるお旅所へ遷幸することを通して、そしていま一つはこれまた大波戸を経由してゆく出島の

オランダ商館長の江戸参府という往還行列によってである。

### 3-8 出島の当初形態と築造技術

さてこうしてみれば、出島がその岬の先端に寄り添うように扇形をなしているのも、何となく了解されそうな気分となろう。もとから円弧形をしていたらろ岬の先端、そしてそれをさらに強調するかのように円弧形に町並みを造成していた江戸町、そういう陸の地先には浅瀬か岩場が同心円的に巡っている確率が高いから、それに沿って埋



図－3．出島完成後の近世港市・長崎の都市構造平面概念図



め立てるのは一応理に適ってはいよう。しかしそれにしても、あまりに見事な「扇面」(『長崎古今集覧』所引「志稿云」)ではなからうか。

ふつうの出島図ではそれでも西側の水門のところに荷揚場としての突出部があり、また陸側から出島橋を渡ったところに表門前の小さな溜まり場があるので、そのことはさほど意識されないかもしれない。しかし実は、築造当初の出島にはこれらの突起が全くない完全な扇面であったことは、筆者がもう一つの「寛永長崎図」と呼ぶ絵図の描写からかつて推定していたところだった<sup>12)</sup>。そしてこの点は、表門そのものの陸側から島側への移築は『オランダ商館長日記』の1642年 3月15日条によって確認され、他方水門の突出部はその後の発掘調査によってそれは築造当初にはなく、のちに3段階にわたって拡張されたことが明らかになった。

とすれば、その当初の完全な扇面のかなめの位置に奉行所が位置することは、単なる偶然とは思われないのではなからうか。つまり端的に言えば、元来「彼等〔ポルトガル人〕のためにひとつの牢獄として作られた嶋」(オランダ商館長日記、1636年7月26日条)であった以上、そこから俯瞰的に監視するという意図が込められていた可能性も十分あるのではないかということだ。

これはさておくとしても、そもそもこういう扇面形の築島をつくるという発想はどこから出たのであろうか。少なくとも国内には類似例は皆無であろう。まだこれという実例は見出しえていないが、海の埋め立てを繰り返して国土を成したオランダならばありそうな気がしないでもない。このことを少しだけ窺わしめる事柄に、出島の外形寸法の問題があるようにも思われる。

出島は前引のように、奉行から「俄に築島を申付」られたのだったが、「其節手前宜町人共二十五人より、差図之通築之」(長崎根元記)という「差図」が図面でなく、単なる指示だったとしても、何らかの設計図がなければ工事には取り掛かれないだろう。しかしそれにしてはその出来上がった形が、「南方百十八間二尺七寸、北方九十六間

四尺九寸、西方三拾五間四尺六寸五歩、東方三拾五間三尺五寸」(長崎古今集覧所引「鑑云」)とやたら端数の多い結果となっている。書物によって尺以下の数字に若干の出入りはあるが、完数のものはないし、これを尺単位で換算しても端数は消えない。それゆえこれは実測値かと推測されるが、一方、完成直後の出島を訪れた平戸のオランダ商館長カロンは「長さは1スタートすなわち600フィート、幅は240フィートある構築物で」と日記に記録している。

むろんこれは日本人から聞いた寸法を概数で述べただけかもしれないが、あまりの違いに驚かされる。しかも幅の240フィートを仮にアムステルダム・フィート(1フィート=28.3cm)として換算すると約68mに対して、東方の35間3尺5寸を1間=6.5尺で換算すると約70mとなり、かなり近い数値が得られる(『長崎集』にいう「横三十四間三尺八寸」を採れば完全に一致する)。がこれに比べて、長さの方は600フィート=約170mに対し、北方96間4尺9寸=約191mとかなりのずれが生じる。単純に日本人が尺で言ったのをそのままフィートと読み替えたにしても、やはり違いは消えない。

甚だ大胆な憶測となるが、出島築造当初の差図では内円長さ600尺×幅240尺、すなわち1間=6尺でいえば100間×40間といったごく簡単な設計寸法だったのではないか。のちの元禄12~15年に造成された新地蔵という築島は、「東西70間×南北50間」(長崎実録大成)だったことからしてもである。現実とのくい違いは、果して設計段階での変更か施工段階での誤差か何も分からないが、もしかすると築造当初の出島は現実にそうだったが、いつの時点かで長さを増築したということもありうるのではないかと思われなくもない。地誌類の「出島築立人数」に記す各人の分担した土地の「表口、裏口」の寸法のあり方からしてもである(補注3)。

以上いささか細部に拘りすぎた嫌いはあるが、しかしここにはどうもオランダ人の指導か示唆が介在していたのではないか、という匂いが予感さ

れなくもないのでやや詳述した次第である。

さて、ともあれこうして達成された近世都市・長崎は、その後、17世紀の中頃から末にかけて市中の川筋には先の廊橋群に替わって、世界的にも稀な極めて濃密な石造アーチ橋群を形成したり、同世紀末の元禄年間には今度は中国人を閉じ込めるための唐人屋敷とその貨物庫としての上述の新天地を新しく築造するなど、いくつかの改変を加えながらであるが基本的には幕末の開国までその姿を保つことになる。次節では、一層大きな波が海外から押し寄せてくることになる幕末以降の近代を考えてみることにしよう。

#### 4. 外国人居留地の造成と港湾改修による近代都市・長崎の形成と変遷 (以下未完)

#### 5. 海を渡った建築術

最後に少し視点を変えて、以上に見てきた近世～近代の長崎における建築の中に、海外との交流、交渉の形跡を探っておくことにする。

- 5-1 眼鏡橋—石造アーチ構造／平戸オランダ商館経由の構築技術
- 5-2 唐寺—前巻（黄檗天井）・虚柱など／部材の舶載／中国人工匠の介在
- 5-3 洋館—先駆けとしての出島／下見板張り・ヨロイ戸
- 5-4 天主堂—木製リブ・ヴォールト天井／ゴシック・リヴァイヴァル

#### 結 び

時間の都合で、文章・図とも未完の大変見苦しいレポートとなったことをお詫びしなければならない。

終わりに、もう一度、茂吉の歌一首を引いてひとまず結びに代えたい。

長崎は石だたみ道ヴェネチアの  
古りし小路のごとこそ聞け

#### 〔注〕

- 1) 「港市」なる用語については、安野眞幸『港市論 平戸・長崎・横瀬浦』(1992, 日本エディタースクール出版部)を参照されたい。
- 2) 以下本稿に引く文献史料は、いずれも公刊本によったが、煩を避けるため書名は明記するが、発行者・年月等の注記を省略する。但し研究書はその限りでない。
- 3) ディエゴ・パチェコ『九州キリシタン史研究』1977, キリシタン文化研究会。
- 4) 安野眞幸; 前掲書。逐一当該頁は示さないが、以下の言及もすべてこれに拠る。
- 5) 古賀十二郎『長崎開港史』1957, 同翁遺稿刊行会。
- 6) ディエゴ・パチェコ; 前掲書, 133～139頁。
- 7) 高瀬弘一郎『キリシタン時代の研究』1977, 岩波書店。安野; 前掲書。
- 8) 高瀬; 上掲書, 423頁。
- 9) この点は、中村質『近世長崎貿易史の研究』(1988, 吉川弘文館)の序章を参照されたい。
- 10) ディエゴ・パチェコ; 前掲書, 『長崎実録大成』『切支丹寺焼捨之事』条を参照。
- 11) 中村質; 前掲書第3章, 91～93頁。
- 12) 拙稿「長崎「出島」の最初期様態とその絵図」日本建築学会大会梗概集1988, 拙稿「出島の水門と荷役場の変遷について」(『史跡「出島和蘭商館跡」護岸石垣復元報告書』2000, 長崎市教育委員会, 所収)を参照されたい。



## (補注1)

単独の論文とするためには前置きや未完の部分を省略し、またそれに伴い文章表現も改めるのが穏当であろうが、ここではシンポジウム用のレポートとして作成したその雰囲気を残す意図もあって、敢えて原文のままとした。了とされたい。但し紀要論文とするために規定に従って英文標題とSynopsisを加えたこと、「はじめに」の項を追加したこと、また長文にわたる内容をより分かりやすくするため第2、3章には原文になかった小節の区分を設け、そのタイトルを付したこと、原文よりは改行をやや多くしたこと、3-7節の末尾に遊廓のことを加筆したこと、これに伴い図-3を若干改訂したこと、これらが原文からの変更箇所である。このほかは上記の理由で、単純な誤植の訂正を除き原文をそのまま踏襲している。

## (補注2)

この点は、かつて郷土史家の某氏がどこかで指摘されていたようにも記憶する。脱稿後にこのことを思い出したのだが、未だにその典拠が見出せないため、暫くはこのままにしておくことをお許しいただきたい。

## (補注3)

「出島築立人数」として25町人の氏名と各人の分担を「表口、裏口、奥〔行〕」として記すその数値には、史料によって多少の出入りがあるが、いま中央街路を境に海側と陸側を分けて記していて、その数値も比較的信頼性が高いと見受けられる『長崎港草』によって、陸側の土地の裏口の総計を求めると（但し、末次宗徳分として「表口十一間二尺五寸、裏口十七間七寸五歩」とある裏口寸法は、山岡平吉分には「表口十一間二尺五寸、裏口十間七寸五歩」とあることからしても、後者に倣って改訂した上でだが）、589.9尺となる。これに縦の街路幅を考慮すると、600尺という数値に近似するからである。あるいは、589.9尺は1間=6尺5寸で計算すれば90間4尺5寸となるので、内円長さを6尺5寸=1間の90間と設定していたことも考えられなくはない。いずれにせよ当初の設計寸法はごく単純な完数であったことは、十分

想定しうるところであろう。と同時に、築造当初の出島は東西が内円長さで約6間ほど短いものだった可能性もあることになろう。今後の精査を期して、一応の仮説として記しておく。